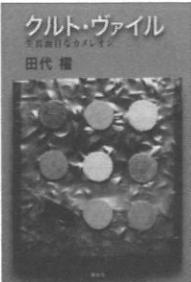


BOOKS



『クルト・ヴァイル 生真面目なカメリオン』

田代 榊 著
春秋社 本体3500円+税

後期ロマン派の雄・ヴァイル その全貌が明らかになる――

クラントン・ヴァイルについて日本語で一冊になっている本はあまりない。現在では入手できなくなったりもする。そこに本書があらわれた。21世紀になってからブルックナー、マーラー、リヒャルト・シュトラウス、ベルクと、後期ロマン派から現代への架け橋となるドイツ語圏の作曲家について書いてきた人物の手で、だ。一見、この流れのなかにヴァイルがあることに違和感を覚えないではない。ベルリンからパリを経由してブロードウェイへと移動していくこの人物が、どうつながってくのか、と。その関心からも、本書を手にとる価値はある。文章は伝記的事実をつらねていぐかたちをとり、著者自らの見解はとても抑制されている。一般的には「ヴァイル」から「ワイル」へと呼称が変わった、アメリカ亡命後の評価が低いのを意識しつつも、各作品を丁寧に紹介していく。写真も多い。その意味では、たしかにヴァイルを扱っているが、過剰な思い入れや偏見がない、距離をとった本といえよう。ただヴァイルという人にはつきり焦点があたっている分、時代や交流など、脱線の部分が少ないので残念に思えなくもない。著者のスタイルとしては、あくまでないものねだりに過ぎないけれど。

著者は本年4月に世を去了。ドイツでギターを学び、田代城治の本名で演奏活動を、並行して田代櫻の名で執筆をおこなった。先にふれた作曲家伝以前に『湖のトリスタンルートヴィヒ二世の生と死』が初めてのもので、音楽之友社からの出版だった。「田代櫻」による100年前の音楽の屈折のさま、その静態的に記された流れのさまを、現在に重ねてみると、あるいは参考にすることもできるだろうか。こつこつと資料にあたって綴られゆく複数の作曲家像を全体として見渡したとき、どんな絵柄が浮きあがってくるのか。あらためて6冊の本を読みかえしてみよう。

■小沼純一



『ティンパニストかく語りき
『叩き上げ、オーケストラ人生』

近藤高顯 著
Gakken 本体1500円+税

ティンパニの魅力と深奥 音楽の醍醐味を伝える名エッセイ

ステージのいちばん奥に陣取ってあたりを睥睨し、ときに大音量で他の数十人を圧倒するティンパニは、オーケストラの演奏会でもっとも目立つ楽器の一つでありながら、聴衆から積極的な興味を持って注目してもらう機会は多くないかもしれない。この楽器の演奏法に国ごとの違いがあり、流派があり、個性があるなどと考えながら演奏を聴いた人は果たしてどれくらいいるだろう。本書は新日本フィルハーモニー交響楽団で首席ティンパニ奏者を務める名手が、折に触れてこの楽器について綴ったエッセイを中心としてまとめられたものである。

著者は東京藝術大学打楽器を学んでいたときにベルリン・フィルの演奏会を聴き、そこでティンパニを受け持っていたオズヴァルト・フォーグラーの演奏に衝撃を受けて、ドイツに渡って彼の下に学んだ。帰国後は新日本フィルにポストを得ると同時に、多くのオーケストラの来日公演に客演して、数々の名指揮者や名演奏家たちとも共演している。ここで彼は、楽器の奏法を学び、手入れの仕方を修業し、オーケストラでの経験を積み重ねる中でティンパニ奏者として学んだことを語ると同時に、そうした経歴の途次で出会った、ベルリン・フィルの名手たちや巨匠と呼ばれる指揮者たちを活きいきと描写し、歴史に名を残す作曲家たちを、ティンパニ奏者としての視点から論じていく。一見バカでかい音を叩きつけるだけとみなされがちなティンパニの一音一音が、実はどれだけの鍛錬と思考の末に生み出されているのか、その響きが、オーケストラ全体のサウンドとどのように関わるのか。個人の体験を単に面白おかしく語るではなく、それらを通じてティンパニという楽器の奥深さを垣間見せ、また同時に、どんな側面から切り取っても興味尽きないクラシック音楽の魅力を再認識させてくれる一冊といえる。

■相場ひろ



『オーケストラ解体新書』

読売日本交響楽団 編
中央公論新社 本体1400円+税

読響の現在を通して描かれる オーケストラの「舞台裏」

この『オーケストラ解体新書』は、読売日本交響楽団によって刊行された、オーケストラの解説書である。執筆者は、飯田政之前読響常任理事・事務局長（現福岡放送取締役）と松本良一読響演奏総務部長代行。つまり、オーケストラの事務局がオーケストラについて書いた本なのである。さすがに新聞社系列の楽団だけに、読み物としても、プロの手による書物に仕上がっている。単なる読響のガイド・ブックに終わらせていない。

読響という一つの具体的な団体を通して、オーケストラの楽団員や事務局の人々が日々どのような仕事に取り組んでいるのか、つまりオーケストラの舞台裏が描かれている。指揮者や楽団員の生の声が盛り込まれていて、もちろん読響のファンにとってはとても関心をそそられる内容であろうが、たとえ読響ファンでなくても、オーケストラというものの現実を知る上で興味深く読める一冊である。圧巻は、2016年10月19日の定期演奏会（指揮：シルヴァン・カンブルラン、ヴァイオリン独奏：五嶋みどり）のリハーサルから本番までの舞台の表裏を詳細にドキュメントした第3章。そのほか、セルジュ・チェリビダッケとの共演の話も貴重である。常任指揮者カンブルランのインタビュー、来春首席客演指揮者に就任する山田和樹を交えた座談会も収められている。読響の今の姿を留めるだけでなく、歴史を遡ったり、広い視野で日本や世界のオーケストラ界を語る姿勢も、本書の内容を豊かにしている。ただし、執筆者が楽団当事者だけに書きにくいことがあるかもしれないが、オーケストラの経営について、他団体と比較しながら、具体的な数字（例えば年次による予算内容の変化など）を交えてもっと詳しく述べられていれば、読み手も、より明確にオーケストラというものの実態を理解することができたであろうと思われる。

■山田治生



『ヴォイス・ケア・ブック 声を使うすべての人のために』

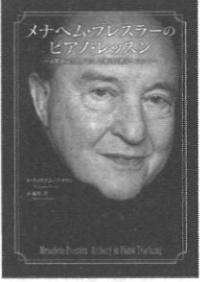
ガーフィールド・デイヴィス、アンソニー・ヤーン 著
竹田数章 監訳
音楽之友社 本体3200円+税

声楽家・医師双方に有益な 座右とすべき「半医学書」

「発声」というものは普遍的な原理原則はあるにせよ、歌手一人ひとりが感じる感覚は千差万別。「自分の発声法こそが正しい」と信じて書かれた本は数々あるが、ここに登場した書はそれらとは一線を画す。イギリスの耳鼻咽喉科医であり、英國王立音楽院やロイヤル・オペラ・ハウスなどの顧問ヴァイス・ドクターを務めるガーフィールド・デイヴィスと、米メトロボリタン歌劇場医療部門の主任医師であるアンソニー・ヤーン、アメリカの言語聴覚士アナト・ケイダー（13章のみ）が共同執筆した、客観的な「半医学書」とでも呼ぶべき本である。翻訳者にも耳鼻咽喉科の医師が名を連ねているのも頗らしい。序文に「声に興味を持つ耳鼻咽喉科医向けの本はたくさんあります。しかしそれらの本は、声を使用する舞台芸術のビジネスにおいて、芸術家と医師がともに直面する多くの関連する事を二者が協力して取り組むと言う視点に欠けています」とあるのは大いに首肯できる。

声を使うプロの歌手や役者たちにも役立ち、同時にそうした声を酷使する職業の患者に向かう耳鼻咽喉科医たちにとても役に立つ、臨床事例に基づいた情報が網羅されている。发声のメカニズムや筋肉の動きが説明されていることはもちろん、音声障害の症状、原因、治療法、薬剤（ステロイド、トローチ、スプレー、うがい薬）の声への影響、喉だけではなく身体の他の部位の手術を受ける場合の麻酔薬の選択、声を仕事にしている人たちに及ぼす心理的な影響の大きさ、年齢的な声の衰えはいかにして起きるか、また声の疾患の種類とその症状、治療、予防法、そして医師・声楽家双方の専門用語の解説までと行き届いている。巻末口絵のQRコードを読み込むことによって、健康な、あるいは疾患を抱えた声帯の動画をYouTubeで見ることも可能。困った時に紐解く資料としての価値が高い、いわば「歌手のための家庭の医学」として手元に置いておきたい座右の本である。

■河野典子



『メナヘム・プレスラーのピアノ・レッスン 音楽界の至宝が語る、芸術的な演奏へのヒント』

ウィリアム・ブラウン 著 瀧川淳 訳
音楽之友社 本体3700円+税

様々な視座からまとめられた 巨匠プレスラーのピアニズム

メナヘム・プレスラーと言えば、「ボザール・トリオのかなりうまいピアニスト」くらいの認識しかなかったのだが、3年前にサンタリーホールで行われた庄司紗矢香とのリサイタルを聴いて驚嘆した。演奏はモーツアルトのソナタやブラームスの《雨の歌》、他。各作品の魅力が伝えられるのはもちろんのこと。何より感銘を受けたのはその音だ。「脱力のタッチ」はまさに理想的と思えるもので、ピアノを弾いて、楽器を感じさせず、音だけが自由に飛翔し、庄司とこの上なく幸福な音楽を奏でていた。当時プレスラーは90歳。ひょっとしたらこれは、今は失われたピアノ演奏芸術の、あるいはヨーロッパの音楽の奥義なのかもしれないと思ったものだ。

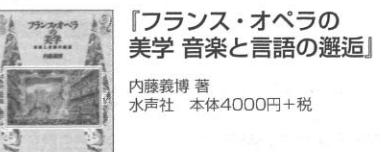
それ以来プレスラーはソリストとして何度か来日し、ソロのディスクも見かけるようになったが、実際には10年ほど前にボザール・トリオを解散し、教育活動と並行してソリスト、室内楽奏者として新たなスタートを切っていたのだ。本書はそんなプレスラーがアメリカの音楽大学の講演やレッスンなどで語ったことなどを纏めたものだ。

著者のブラウンはプレスラーに師事したピアニストで音楽大学のピアノ科教授。著者が行ったインタビューや解説、コラムなどで構成されるが、パート1「教師としての人生」では、プレスラーのドイツでの出生、師や音楽上のルーツ、アメリカ移住後の演奏家や教師としての活動、基本的な音楽観や指導法などが語られ、パート2「レッスン」では、バッハのパルティータやチャイコフスキイの協奏曲など23曲の具体的な解説が、小節単位の図表と彼自身の言葉で示されるので、楽譜と共に本書を紐解けば、レッスンを受けるに等しい。もちろん「脱力のタッチ」など技術的な事柄も具体的に教えてくれる。訳文もこなれていて読みやすい。ピアノ・ファン必携の書だ。

■那須田 務

News & Information BOOK-END

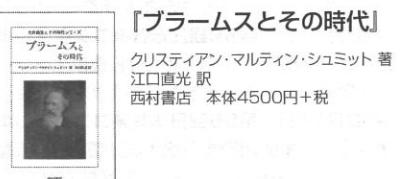
16~17世紀フランス 変貌するオペラを追って



『フランス・オペラの美学 音楽と言語の邂逅』
内藤義博 著
水声社 本体4000円+税

17世紀フランス、卑俗な舞台劇であるとして過小評価されていたオペラが、18世紀には魅力的な舞台演出と音楽で独自の領域を切り開く、その変貌を辿る一冊。リュリ、ラモー、グルックなど、古典派以前のフランス・オペラ史をまとめた貴重な内容、オペラ・ファンは必読の書となるだろう。

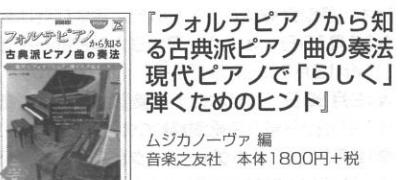
「古典」と「革新」 ブラームスの本質に迫る



『ブラームスとその時代』
クリスティアン・マルティン・シュミット 著
江口直光 訳
西村書店 本体4500円+税

ヨーロッパで活躍する音楽学者たちによる人気の「大作曲家とその時代」シリーズ第4弾にブラームスが登場。作曲家が生きた社会的背景と自身の歴史観を辿りながら、形式美に富んだ古典的な面と、後にシェーンベルクが評した革新的な面を持つブラームスの名曲たちの本質を読み解いていく。

知っておきたい 「古典派」への道



『フォルテピアノから
古典派ピアノ曲の奏法
現代ピアノで「らしく」
弾くためのヒント』
ムジカノーヴァ 著
音楽之友社 本体1800円+税

古典派時代のピアノ作品をフォルテピアノによる演奏で聴くことが珍しくなった今日、その特性を活かすために「現代ピアノでどのように弾いたらよいか」をテーマとしたレッスンをまとめたムック。フォルテピアノの第一人者である小倉貴久子が講師を担当、作品の時代背景、奏法など、演奏をするためのヒントがたっぷり詰まっている。DVD付。